学術・文化で活躍した人

木村正辞（きむら　まさこと）

文政10年～大正2年（1827～1913）

国文学者
万葉集研究の第一人者

成田市仲町に生まれる。幼名は荘之助。「辻堂塾」で読書と習字を主に学ぶ。10歳を過ぎたころには、「唐詩選」「百人一首」を会得したといわれている。16歳のとき上京し、国学を伊能頼則（ひでのり）に、漢学を寺門静軒（てらかどせいけん）に、和漢学および音韻学を岡本保孝に学んだ。このころ、木村家の養子になり改姓。明治2年に史料編集、大学大助教となり、以後、文部省や司法省などの諸官、文科大学教授など歴任。明治23年、東京学士会院会員に選ばれた。代表作に、『万葉集美夫君志（みふくし）』『万葉集書目』など。明治34年、文学博士の学位を授与される。生涯を万葉集の研究に打ち込んだ。

成田小学校校庭に立つ生誕記念碑

万葉集研究にかかわる自筆原稿

学術・文化で活躍した人

鈴木雅之（すずき　まさゆき）

天保8年～明治4年（1837～1871）

幕末の農村を国学の精神で
更正を図った学者

成田市南羽鳥に生まれる。家業は農業で姓を穂積といい名を一平といった。18歳のときに神山魚貫（なつら）から和歌と国学を学び、師と仰いだがあとは全て独学であった。20歳のころ郷里を出て遊学の旅に出、寺子屋などの師匠をしながら国学の普及に努めた。

雅之の学問は農民生活の体験に根差した自覚と反省の結果から生まれた。哲学・政治経済・和歌など多数に及ぶが、『民生要論』『捕盗安民策』『治安策』などが代表的なもので、農村の疲弊や困窮をあげ、具体策を説明し、均田法の実施、土地移動の防止、貨幣価値の安定などの政策をあげている。成田山仏教図書館に所蔵されている79点の著書は、成田市指定文化財である。

指定文化財の雅之著作集（一部）

35歳の若さで亡くなった雅之の墓

学術・文化で活躍した人

今沢慈海（いまざわ　じかい）

明治15年～昭和43年（1882～1968）

図書館界の先駆者
成田図書館長を務める

愛媛県西条市に生まれる。本名は市次郎。国保寺住職の養子となり、寺で修行を積み「慈海」と改名する。しかし、勉強好きと向上心から東京に出て、東京帝国大学（現東京大学）に学ぶ。明治41年東京市の事務員となる。大正2年日比谷図書館に勤務し、翌年館長となる。同10年に文部省図書館講習所の講師となり、昭和15年まで20年間務める。この間世界各国の文献を調査研究し、大正15年には『図書館経営の理論及び実際』を出版している。

昭和9年、成田山の荒木照定住職から要請され、成田中学校校長に就任。同15年成田山教務顧問に、同23年には成田山教育文化財団理事長と成田図書館（現成田山仏教図書館）館長に就任した。代表的な著作に『表解詳説梵文典（ぼんぶんてん）』がある。

「龍」と書かれた書

学術・文化で活躍した人

鈴木三重吉（すずき　みえきち）

明治15年～昭和11年（1882～1936）

童話作家
童話童謡雑誌『赤い鳥』を創刊

広島市に生まれる。東京帝国大学英文科卒。在学中に書いた「千鳥」を夏目漱石が推奨、『ホトトギス』に発表し好評を得た。漱石の門に入り、明治40年、処女作『千代紙』を刊行し、新進作家としての地位を固めた。明治41年10月から44年4月まで、成田中学校（現成田高校）の教頭兼英語教師として奉職。同43年、国民新聞に連載された「小鳥の巣」は、当時の校長の理解ある計らいで、約5カ月間休職という形で執筆された。成田時代に書かれた作品には、『小猫』『民子』『黒皿』『エピソード』などがある。大正に入ると、童話作家に転じ、大正7年、童話童謡雑誌『赤い鳥』を創刊し、児童文学の発展に寄与した。

児童文学史上に残る童謡雑誌『赤い鳥』

学術・文化で活躍した人

水野葉舟（みずの　ようしゅう）

明治16年～昭和22年（1883～1947）

詩人・随筆家・小説家
郷土の文化向上に寄与

東京都台東区に生まれる。本名は盈太郎。福岡県立豊津中学校を卒業後、上京し、与謝野鉄幹の新詩社に入り、「明星」の同人となる。このころ、生涯無二の親友・高村光太郎らを知り、詩歌に励む。明治38年、東京専門学校（現早稲田大学）を卒業。

大正13年2月、成田市駒井野に藁の穴と呼ばれる開墾小屋を作り移り住み、農耕のかたわら数々の作品を発表。土地の文学好きな青年たちと七葉会を結成。また、下総郷土談話会を主宰し、民俗学的な研究にあたる。昭和6年、成田山新更会の機関紙「新更」の詩の選者になり、自らも小説や詩を同紙に発表。さらに、印旛国語同好会との交流をもつなど郷土の文化の向上に寄与した。

葉舟書の和歌

駒井野の開墾地に住んだ葉舟（昭和2年）

学術・文化で活躍した人

土肥刀泉（どい　とうせん）

明治32年～昭和54年（1899～1979）

陶芸家
日展会員　参与を務める

成田市八代に生まれる。本名は卓。成田中学（現成田高校）在学中は、文集作りに励むなど文学的な一面をもつ青年であった。職人を雇い、吾妻神社（現吾妻3丁目）のそばに登り窯を築き、父とともに吾妻製陶を起こした。大正12年の関東大震災で窯が壊れ、一家は千葉の椿森に転居し、新たに東陶窯を開く。

昭和3年、旧家国松家（国松薬局）の長女と結婚。同家の支援により、刀泉陶芸は識者の間に次第に知られるようになっていった。同24年、千葉県美術会の創設に参加。昭和24年から54年まで、長年にわたり出品を続け、陶芸家として名を成す。同33年から日展会員に、同49年から日展参与を務めている。

吾妻神社のそばの窯で焼かれた吾妻焼